

ご挨拶

東京矯正歯科学会

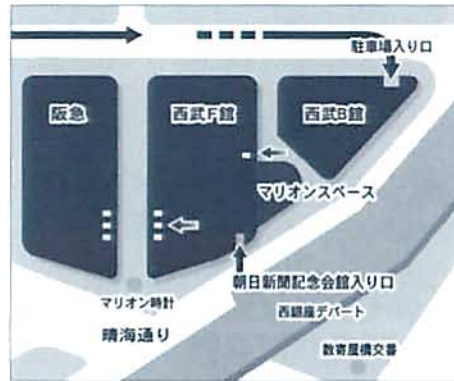
会長 鐘ヶ江 晴秀

今回の春季セミナーは学術委員会のご提案により、「効果的な大臼歯遠心移動法について考える」のタイトルのもと、大臼歯遠心移動の問題を取り上げてみたいと思います。

私が矯正学を勉強し始めた1970年代においては、大臼歯遠心移動の方法はヘッドギアが主で、その効果は患者さんの協力に大きく依存していました。多くの場合、アメリカの教科書に書いてあるような一日中の使用はできず、その効果も限定的なものであったと思います。しかしその後1990年代になると、GMD、Distal jet、Pendulumなどの装置が導入されるようになり、より効果的な遠心移動が可能となりました。さらにインプラントアンカーの出現は、大臼歯遠心移動をより確実なものにするのと同時に大臼歯の圧下も可能にし、咬合の垂直的なコントロールもできるようになりました。このように私たちは、大臼歯遠心移動の手段はある程度獲得できました。しかし、それに伴う診断面はいまだに確立されていないのが現状ではないでしょうか。個々の症例における可能な遠心移動量の決定や、装置の選択基準についてなどが明確にされているとはいいたが、臨床の場で迷うこともあるのではないのでしょうか。

そこで今回のセミナーでは鈴木善雄先生に、Simple Molar Controller (SMC) について、沖藤寿彦先生には、Pendulum Appliance についてご講演いただきます。また、安香譲治先生にはインプラントアンカーについてご講演いただきます。3名の先生は臨床経験の豊富な方々ですので、それに裏づけされた興味ある話が聞けるものと期待しております。従いまして今回のセミナーは、会員の皆様の明日からの臨床に有意義なものになると確信しています。多くの会員の皆様のご参加をお待ちしております。

日本矯正歯科学会認定医の方は、当日、IDカードをお持ち下さい。セミナー参加者は、研修ポイント5点が加算されます。



有楽町朝日ホール

〒100-0066 東京都千代田区有楽町2-5-1
有楽町マリオン11階
TEL (03) 3284-0131

東京矯正歯科学会

東京都豊島区駒込1-43-9 (〒170-0003)

財団法人口腔保健協会内

TEL (03) 3947-8891

FAX (03) 3947-8341

平成21年

東京矯正歯科学会 春季セミナー

効果的な
大臼歯遠心移動法について考える

モデレーター: 森山 啓司 学術委員長

講演者: 鈴木 善雄 先生

沖藤 寿彦 先生

安香 譲治 先生

日時・平成21年4月23日(木曜日)
午後6時より

場所・有楽町朝日ホール

当日会費・無料(会員)

¥3,000(非会員)

鈴木 善雄 先生

1973年 大阪歯科大学卒業
1973年 岐阜歯科大学助手(歯科矯正学講座)
1980年 浜松市にて淺雲堂矯正歯科医院開業
岐阜歯科大学歯科矯正学講座非常勤講師
2005年 朝日歯科大学歯学部補綴学講座非常勤講師
2008年 朝日歯科大学歯学部客員教授
日本矯正歯科学会認定医・指導医



「大臼歯の遠心移動装置 SMC (Simple Molar Controller) の紹介」

近年、大臼歯関係の改善、上顎大臼歯の近心転位や discrepancy の解消の目的で、上顎大臼歯の遠心移動が多く行われている。特に小臼歯の非抜歯を目的とした治療のために、積極的に上顎大臼歯の遠心移動が行われるようになった。

今回紹介する装置は、大臼歯の遠心移動に用いる装置であるが、応用範囲も広く、多くの特徴を持っている。

SMC の基本構造は、舌側弧線、ホールディングアーチ、パララバーからなり、0.8、0.9、1.2mm 線とレジンをを用いて製作する。

固定歯となる小・大臼歯バンドの頬側と舌側部に、パワーチェーンを付けるための、フック付きの 0.8mm 線を装着する。装置装着後は、フックにパワーチェーンを付けて歯を移動する。

装置の特徴は、

- 1) シンプルな装置で効率良く歯の移動ができる。
- 2) 歯の移動が早い。(1か月に約 1mm)
- 3) 歯牙の遠心傾斜や挺出が少ない。
- 4) 下顎の時計回りの回転を引き起こすことが少ない。
- 5) パワーチェーンの交換は容易で、チェアタイムが短い。
- 6) 混合歯列期にも利用できる。
- 7) 構造は単純で、日常用いている材料で容易に製作できる。

SMC の開発の目的は、近心転位した大臼歯を元の位置に移動するためであったが、現在では、小・大臼歯の遠心移動、圧下、頬舌側移動(臼歯 Scissors bite, Cross bite の改善)、傾斜した第二大臼歯のアップライト、などに利用している。

SMC はさまざまなテクニックに応用できるため、先生方の大臼歯の移動装置の一つに加えて、利用いただければ幸いです。

沖藤 寿彦 先生

1980年 東京医科歯科大学歯学部卒業
一般歯科勤務
1982年 東京医科歯科大学第1矯正学教室入局
1988年 同教室退局
北千住矯正歯科(東京都足立区)勤務
1994年 おきとう矯正歯科(東京都中野区)開設
日本矯正歯科学会認定医、日本成人矯正歯科学会認定医



「永久歯列における大臼歯の遠心移動方法について」

1980年代は永久歯列の矯正治療において上顎の大臼歯を遠心移動することは非常に難しく、ヘッドギアを24時間使用しても1mm 遠心に動けば良いほうであった。しかし1990年代になって、GMD, Pendulum Appliance, Distal jet 等々さまざまな大臼歯の遠心移動装置が海外から紹介されるようになった。演者はそれらの装置のなかでたまたま、ヒルジャーの Pendulum-Appliance をアングルⅡ級の過蓋咬合に応用したところ意外に良好な治療結果が得られた。その後この装置を多く用いることとなり、今回それらの症例の一部を供覧する。

後戻りを起こしやすいためその対応措置が必要であるものの、症例を限局すればきわめて短期間に遠心(傾斜)移動が可能となると思われる。

安香 譲治 先生

1981年 アメリカ Northwestern 大学大学院矯正学教室卒業
1982年 アメリカ Northwestern 大学矯正 Master of Science 取得
日本矯正歯学会専門医、日本大学矯正学教室兼任講師



「インプラントアンカー (TAD) による大臼歯の遠心移動」

1999年に嘉ノ海龍三先生が Mini-implant の臨床応用を初めて AAO 学会において発表し、そして同年、菅原準二先生の Skeletal Anchorage System が JCO で紹介され、日本から世界に向けてインプラントアンカーの新しい利用技術が発信されました。それから9年が経過した昨年(2008年)、Seoulにて第1回世界インプラント矯正学会が開催されました。

インプラントアンカーは、最近では TAD (Temporary Anchorage Device) という名称で世界中で用いられるようになりましたが、日本、韓国、台湾など、東アジアを中心に、世界の矯正歯科医によって、この TAD という新しい治療技術をどのように適用すべきかについて検討がなされてきました。TAD の臨床応用は画期的で、それによって歯槽骨内での三次元的な歯の移動が可能になり、Dento-alveolar Orthopedics としての適用も可能になりました。これまで矯正臨床においてきわめて難しいとされてきた大臼歯の遠心移動も、TAD の適用によって可能になったことの一つです。今回、演者は TAD による大臼歯の遠心移動について焦点を絞ってお話をさせていただきます。これまで、Arch length discrepancy (ALD) は、抜歯か非抜歯を判断する際の一つの基準になってきました。その ALD の程度に応じて、術者は、それぞれの理念、メカニクス、経験に基づいて、抜歯か非抜歯かを決定してきました。しかし、TAD の導入によって大臼歯の遠心移動が可能になったことによって、ALD と抜歯基準の関係に変革がもたらされました。すなわち、従来の抜歯基準だけでは対応できない時代になったことを意味しています。今回の講演においては、実際に TAD を適用した抜歯症例と非抜歯症例を介して、このような矯正臨床の本質に関わる問題を皆様と一緒に考えてみたいと存じます。そして、今後の矯正臨床における TAD の役割が大きいだけに、「より良い治療をすべての患者さんに」をモットーに、皆様と力を合わせてこの新しい方法の発展に寄与できれば幸いです。